

## 第1日目【平成24年10月6日（土）】

### 第1回全国 Know 村サミット in とっとり 参加（鳥取県庁 講堂）

#### ○第1部 ワークショップ

ワークショップでは、全国から集まった農村で活動する学生団体と受け入れ地域の皆さんが、活動を継続させる中での課題やその解決策について、ワールドカフェスタイルで話し合い、その後、団体毎に集まって、自分たちの活動に今日の議論をどう生かしていくかを議論し、発表を行いました。

三重県から参加した三重大学の学生の皆さんも、ワークショップに参加させていただき、

- ① 活動をしていく中で感じる課題は何か？
- ② 課題にはどんな解決策があるか？
- ③ ②の解決策のうち、どれがよいか？

の3つのテーマについて、少人数のグループで、毎回メンバー交代しながら議論をしました。



今回、全国から参加している学生団体は、農村部の地域で活動をしている団体が主でしたが、課題にあげられた内容は、他の地域活動をする学生にも共通の課題であると感じられました。

#### 〈主な課題〉

##### （学生団体側）

- ・ 交通手段の確保が難しい。農村地域は、交通の便が悪いところがほとんどで、熱心に活動すればすればほど、交通費がかかってしまう。また、地域の方に送迎をお願いしても、回数や人数が増えると、相手に負担がかかってしまう。
- ・ 活動費は、大学や行政からの助成金と自己負担だが、継続して活動していくと、助成がなかなか受けられなくなってくる。
- ・ メンバーが固定化してしまう。

##### （地域側）

- ・ 学生は、原則土日しか作業ができず、ボランティアの都合に合わせなくてはならないので、お互いに負担が多い。
- ・ 集落の人は、せっかく来てもらったんだからと、毎回、郷土料理などを準備し、おもてなしをしているが、回数、人数が増えるとおばあちゃん達の負担も増えてしまう。学生さんたちは、フランクなおつきあいでよいと言うが、なかなか地域の人たちは、それでは気が済まない。



### 〈主な課題の解決策〉

- ・ 交通手段の確保→神戸大では、地域の教習所と連携し、空いている教習車を借りて、送迎してもらっている。
- ・ 資金力不足→毎回、費用負担を徴収するのではなく、部費制度を取っている。OBや企業など、経済的な余裕がある大人を巻き込んだ活動にしている。
- ・ 昼食などは、お弁当を持参し、なるべく地域の人に負担をかけないようにする。
- ・ 現場と学生だけでは、行き詰まってしまう。そこに地域の企業や住民などを巻き込んでみんなで活動を盛り上げることが大切。

### 〈団体毎に議論〉

ワークショップでの議論を受け、団体毎に、アイデアをどう取り入れて、自分たちの活動に生かしていくかを議論したうえで、それぞれのまとめたものを発表しました。



チーム三重で、今後の活動に生かせることを議論

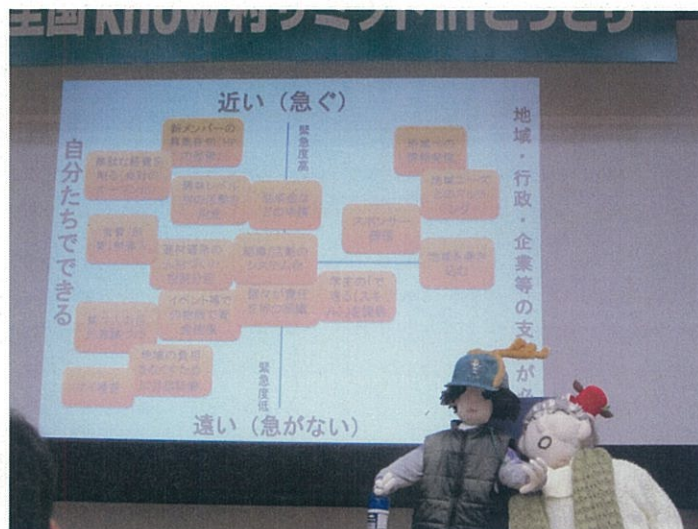


各団体の「これからやります宣言」として発表

### 〈講評〉

ワークショップでの議論、各団体からの今後の方向性の発表を踏まえ、大阪市立大学 佐久間准教授から、第1部のまとめがなされました。

今回、ワークショップで出された課題については、「近い(急ぐ)」か、「遠い(急がないか)」「自分たちで解決できるか」、「地域、行政、企業等の支援が必要か」を整理して、考えていくことが必要との指摘がありました。



## ○ 第2部 サミット会談

### 講演「農山村と若者という資源」鳥取大学 筒井 准教授

- ・ 地域と若者のマッチングは、パズルのピースが合うか、合わないかと似ている。どうやって、WIN-WIN の関係を築けるかが問題である。
- ・ 地域や学生の「強み」と「弱み」を考える必要があるが、そこを誰が考えるのかということが問題になる。それは、プログラムを組む人、コーディネートする人、例えば行政であったり、学生人材バンクのようなNPOであったりする。
- ・ コーディネートする場合に大切なのは、
  - ① 学生のニーズを把握する。
  - ② 地域と密に接する。
  - ③ ネットワークをいかにつくって、どうやって活用するか。という点である。

### 〈地域団体から「地域が学生を受け入れる意義」について発言〉

- ・ 学生の皆さんには、就農を期待しているのではなく、地域での活動を通じて「食」を理解してほしいと考えている。消費者の立場となった時に、農家の思いを理解してくれる若い人が一人でも増えてくれることが、ゆくゆくはメリットになると考えている。
- ・ 学生に何か手伝ってほしいというよりは、若い人たちと交流したいという気持ちで受け入れている。
- ・ 活動にかかる資金不足という課題が出ていたが、まずはアルバイト感覚でもよいのではないか。知ってもらうことが大切。

### 〈NPO法人ふるさと回帰支援センター 高副事務局長〉

- ・ 地域づくりをコーディネートする人が不足している。
- ・ 学生時代が一番地域に入りやすい。(社会人になってからだと、地域の人になかなか警戒してしまう) この学生の気軽さ、受け入れやすさがメリットである。
- ・ 活動が続けると、学生は、お世話になった地域に恩返しをしたいという気持ちが自然に湧いてくる。地域側は、卒業した学生の活用の仕方、長く地域と関わってもらう方法も検討すべきである。

### 〈全国町村会 坂本総務部調査室長〉

- ・ 学生がモチベーションを上げるためには、外からの評価も大切である。今やっていること、今後取り組みたいことなどを発表する場があればよいのではないかと。

### 〈行政の立場から〉

- ・ 鳥取県：学生人材バンクには、10年間という長いスパンで継続的に支援を行ってきたことが、現在の活動に繋がっている。
- ・ 熊本県：昨年からは、農山村と企業を結びつけるプロジェクトを実施している。学生にまずは知ってもらうことが重要であるので、Facebook やマッチングツアーなども実施している。

### 〈大阪市立大学 佐久間准教授〉

- ・ 地域活動を実施するにあたっては、まず、学生はコミュニケーションの技術を身につけることが必要。地域の方にあいさつをすることは基本である。お礼の手紙を書くなど気持ちを伝えることで、つながりが生まれ、メッセージが伝わっていく。
- ・ 地域にとっては、学生をどうやってうまく生かしていくかを考えることが必要。今の学生は、カリキュラムも厳しく、時間的な制限もあるなど枠がある。どこの地域にどんな学生を入れるか、活用の仕方などを検討していくことが必要。



●今回参加した学生の声(第1回全国Know村サミット in とっとり)に参加した感想)

- 自分たちの活動理念をしっかり把握している団体が意外と少ないことに驚いた！「地域や自分たちのためになるから」という動機でしか活動を語れないのでは、他者の理解や協力を得ることはとても難しい。地域の方々の理解を得るとともに自分たちが楽しむためには、どれだけ地域を想い、どのような目的を掲げて活動に取り組んでくるかをメンバー全員が明確にし、共有することが大切！
- 学生、地域の人々、行政等がそれぞれ持つ長所・短所を補い合うことが重要！  
これをベースに学生と地域が連携するための仕組みづくりについて考えていくべき！
- 地域の人には、学生らしさを大切にしてほしいという気持ちがある。地域の人が求めるものを共有できないまま活動することが多いので、それを話し合う機会が必要だと実感！
- 学生には、積極的な対話（対話力、フットワークの軽さ、継続性）、地域には学生を受け入れる体制や学生に期待しすぎず、ともに活動していくという姿勢が求められる。
- 行政、地元企業とのつながりを創って、活動の幅を広げ、継続できるまちおこしの組織づくりをしていきたい！

●12月の交流フォーラムに向けて参考になったことは！？

- ・ 会場の装飾でにぎやかな雰囲気演出。柔らかい空気に包まれていた！
- ・ 配布資料にグループを記入するなど、迷わずテーブルまで行ける工夫！
- ・ あまり、内容を盛り込みすぎると、十分に議論できない。
- ・ ファシリテーションの重要性！
- ・ 参加者の意識を高める会場づくり！傍聴者にも自分の意見を付箋に書き、ホワイトボードへ貼るなどの工夫がなされていた。
- ・ 参加者のルールの張り紙、プログラム冊子の配布など

## 第2日目【平成24年10月7日（日）】鳥取大学

### 学生人材バンク 代表理事 田中 玄洋氏より、学生人材バンクの仕組み、活動について説明

- ・ 学生人材バンクは、学生と地域を結びつけ、学生にはきっかけを、地域には笑顔を届けることを目的としている。
- ・ 鳥取大学の近くに「鳥取情報市場」と「アジト」という学生が集う場がある。ここが学生の交流の場となっている。やはり拠点があることは大きい。またここは、社会人との接点ともなっている。（「アジトの宴」などさまざまな主体と飲みながら議論できる場などを提供）
- ・ 具体的には、メール登録をした学生に、ボランティア情報、アルバイト情報、イベント情報などを配信しており、学生スタッフによる企画事業も実施している。情報量は、アルバイトとボランティア情報がほぼ同じくらい。
- ・ 現在、鳥取大学の学生の20%がメール登録をしており、学生スタッフは約30名いる。学生スタッフは、企画を担当。実際の作業のみを実行する学生は、多数。
- ・ メール配信は、ボランティア情報だけでなく、アルバイトやイベント情報も流している。これは、特にボランティアや地域活動に意識がない学生にも何かのきっかけになれば、よいのではないかとということで、「アルバイトじゃないけど、なんか面白そうなイベントだから、やってみようか」というきっかけづくりが目的。実際に、たまたま参加したことがきっかけで、地域活動をはじめた学生もいる。
- ・ 地域と学生をつなぐにあたって、継続的な参加を生み出す仕掛けづくりや参加者のモチベーションづくり、人とのつながりを感じる場づくりを意識している。
- ・ 現在の学生は、大きく3つのタイプに分かれる。自分でどんどんトライしていくタイプはごく少数。大部分が、背中を押してもらったらやってもいいかもと思っているタイプか、ほとんどそういうことに興味がない層。特に興味がない層には、何らかのメリット（食事、単位など）で誘うしかない。最近の学生は、リスクを取らなくなっている。とりあえずやってもらうことが最初の一步。はじめて参加した学生には、極力声がけなどをしていくことも大切。
- ・ 地域側も、学生の実態を理解してもらう必要がある。現在は、カリキュラムも厳しくなり、4年間のうち、実働年数は、3年前期ぐらいまで。学生が入れ替わると、それまで個人に積み上げたノウハウ、経験が流失するので、それらをどう次に引き継いで、活動のクオリティを維持するかが難しい。また学年によってもカラーがある。
- ・ 学生の時間軸については、以下の点について地域の人にも理解を求める必要がある。
  - ①テスト期間は、全てNG→本業は学業。テスト期間の参加者は皆無。
  - ②平日昼間の学生確保の可能性は低い→本業は学業。最近では出席についても厳しい。
    - ※ 単位と絡めることが可能であれば、参加学生は増える。
- ・ 学生人材バンクが主催する事業のキーワードは、
  - 「知らせる」→きっかけづくり
  - 「考えさせる」→現場づくり
  - 「学ぶ」→ノウハウの提供
- ・ 地域からの依頼については、お金をもらうもの（アルバイトとしての募集）とお金をもらわないもの、情報として流すことが無理なものを学生人材バンクが依頼者からヒアリングして仕分けている。結果を求めるもの（いついつまでに、何かを仕上げるなど）や、



募集の期限が迫っていて、確実に人数確保が必要なものは、アルバイト募集としたほうがよいと説明している。ボランティアは、地域側にも、学生とコミュニケーションを取ってやっていく意識が必要。

- 昨日のワークショップでは移動手段の確保が課題に出ていたが、学生人材バンクでは、共有で使える公用車を購入して、使用している。ただし、人が増えると共有財産への意識が薄れてしまうので、最近では事故などをおこす回数も増えており、課題となっている。
- 地域には、受動的な取組から能動的な取組へ、人手確保の発想から、学生と一緒にやることが面白いという発想へ変わってもらえるように仕掛けている。
- 地域の方は、学生に多くを望むことがあるが、常に学生を育ててあげるという意識を持って、長い目で暖かく見守ってもらえるようお願いしている。そのためには、まずはごはんと一緒に食べる時間を持ってもらうようお願いしている。
- 行政（職員）に対して（特に市町職員）は、事前情報が弱い。地域の実情については、学生のほうが詳しい場合もある。現場を知らずに、資料を求めてくることもある。数年で異動したり、担当者がコロコロ変わるので、そのたびに同じことを繰り返す必要が出てくる。事業委託や助成についても、地域の活性化や人材育成に関するものは、長いスパンで支援することが必要。（※鳥取県は、学生人材バンクへ10年間事業委託を継続しており、それでノウハウの蓄積や人とのつながりができてきた。）  
行政職員も是非現場に出てほしい。新規で事業を実施するときも、現場に相談無く決めて、予算が決まってから、やってほしいと話を振ってくるが、それでは動けないこともある。
- 学生スタッフについては、他にやりたいことができた時には、けじめある撤退を求めている。こういう理由で、いついつまでにやめるということを他の学生スタッフに伝え、きちんと次へバトンタッチできるようなやめ方をさせている。
- 地域からの要望についても、学生が参加するメリットが無くなった場合は、これ以上学生の派遣は難しいことを地域に伝えている。（こういう観点での見直しが必要というアドバイスも含めて）
- 今後の課題としては、ノウハウの蓄積をどうしていくかということ。現在は、SNSにファイルとしてアップしたり、企画事業については、会議等の議事録を残すようにしている。

## ○鳥取情報市場について、現場見学



鳥取大学から徒歩5分程度のところにある。  
学生だけでなく、誰でも立ち寄れる。





アルバイト情報とボランティア情報は並べて掲示。メール配信もしているが、さらに掲示を希望する場合は、ここに張りだす。



学生が気軽に立ち寄れるよう、雑誌や本、講義用の教科書の無料譲渡（先輩からの寄付）など、さまざまな情報が得られる機会を提供している。



学生の作業スペース。ここで企画会議などができる。またコピー機もあり、一般の人でも使用可。（コピーは1枚5円）

●今回参加した学生の声(三重県でも取り組めること、三重県独自に検討が必要なこと)

- ・ メール配信、学生スタッフの導入、ボランティアの単位化、学生が集まる交流拠点の設置などは、三重県でも検討すべき！
- ・ ボランティアコーディネートの役割は非常に重要であり、三重県でも取り入れるべき。
- ・ 三重県での組織づくりは、誰か強力なリーダーに任せるのではなく、行政や地域、団体のメンバーが協力・連携し合い、丈夫な仕組みづくりが必要！